

東大病院創立150周年に向けて

第9回—内科、小児科、皮膚科の初代教授—

1. 内科学教室

33歳で帝大医科教授、39歳で第1内科教授に就任し41歳で退官した佐々木政吉—日本人臨床教授第一号—



佐々木政吉教授

佐々木政吉は安政2年(1855)江戸本所に生まれた。旧姓・中田。幼い時より学業を好み、塾でも一番であった。実家は貧しく教育費を出すことが困難であった。9歳の時に名医で名高い佐々木東洋の養子となった。

明治4年(1871)東京医学校に入学し、明治12年(1879)に同級生20人の中で2番で卒業した。同級生には眼科の初代教授となった梅錦之丞、産婦人科の初代教授となった清水郁太郎がいる。卒業成績が1・2番まで官費留学を許された。しかし、父親の医師・佐々木東洋は官費留学になると大学に縛られることを心配し、私費留学を勧めた。翌年の明治13年(1880)より17年(1884)までの5年間ベルリン大学に留学した。主に病理学を研究した。ベルリン大学の病理学の教授はVirchowであった。明治19年(1886)帝大医科教授となった。33歳のことである。日本人の教授として第一号である。それまではドイツ人教師が内科を教えていた。明治26年(1893)39歳で第一内科の教授に就任したが、明治28年(1895)41歳で退官した。その後任がわが国の内科の重鎮となる三浦謹之助である。佐々木政吉は第一内科の教授を辞職すると同時に、父親の杏雲堂病院の院長となった。肺結核を専門とし杏雲堂病院は東京で最も有名な私立病院として発展した。佐々木政吉の聴診は天下一品と称され大きな名声を得た。一般の人々のために「冷水摩擦と健康法」の話をよくした。結核の治療のために大気安静療法の必要性を感じ、平塚に分院を建てた。62歳で病院を退いた。昭和14年(1939)85歳で亡くなった。佐々木政吉の胸像が初代の東洋と並んで現在の杏雲堂病院の玄関に置かれている。その養子が佐々木隆

興である。杏雲堂病院は佐々木研究所を併設させ、癌の実験病理を行い人工癌の研究で大きな成果をあげる。佐々木隆興は明治35年(1902)東京大学医学部を卒業し、明治38から43年の5年間ドイツのストラスブルク大学とベルリン大学で研究をした。大正2年から5年まで京大の内科学の教授として勤めたが、その後杏雲堂病院の院長として内科の臨床と佐々木研究所での人工癌の研究に打ち込んだ。アゾ色素による人工癌が高く評価される。佐々木研究所は民間の研究所として優秀な人材を東大病理学教室より集め癌の研究で大きな成果をあげた。吉田富三の吉田肉腫もその一つである。東大医学部本館3階にある解剖標本室にはアゾ色素、バターイエローによる人工癌、吉田肉腫の病理標本が展示されている。



現在の杏雲堂病院、日大駿河台病院と明治大学の間にある

杏雲堂病院はお茶の水駅より徒歩3分の駿河台にある。
参考：杏雲堂病院百年史

2. 小児科学教室

31歳で初代の小児科学教授に就任し31年間活躍した弘田長



弘田長教授

安政6年、土佐国幡多郡中村町に生まれた。明治4年13歳の時に父に伴われて上京し、その年の11月に大学東校へ入学した。ドイツ人医師のミュラーとホフマン